

草庵仏教

第174号
(発行日)
2004年12月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
メール：kimyou3@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学の会(輪読形式。第一と第三木曜日午後7時より)
*8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

真宗問答 ⑥ 法蔵菩薩の代受苦

p 「仏説無量寿経(大経)では、釈尊がお弟子の阿難尊者の問いにこたえて、説法をはじめられたとのことですが、どのような内容の説法ですか」
d 「一言でいえば、阿弥陀仏の本願をお説きになりました」
p 「阿弥陀仏の本願の内容を少しづつお話しください」
d 「無量寿経において釈尊は、大寂(じやく) 静弥陀(じやうみだ) 三昧(さんまい)に入られ、阿弥陀(あみだ) 仏の本願を感得(かんとく)され、それを物語風(ものがたりかぜ)にお説きになっていました」
p 「それをわかりやすくお話しください」
d 「大経によりますと、(昔々、ある王様がいました。その王様が)ある時、世自在王(よしみぞの) 仏という仏様の説法(せっぽう)をお聞きになって非常に感動(かんとく)し、菩提(ぼだい) (さとり)を求め、心をおこしました。そして、国も国王(こわう)の位も捨て、出家(しゆがい)し、その名を法蔵(ほっそう)としました」と

説かれていきます」
p 「その法蔵菩薩(ほっそうぼさつ)が阿弥陀(あみだ) 仏の前身(ぜんしん)なので、法蔵(ほっそう)様はもと国王(こわう)であつたが、それを捨てられたというの(は)何をいおうとされているのですか」
d 「それは、仏法(ぶつぽう)というものは世間(よこしま)での最高(さいこう) 価値(かち)を捨てても悔(くは)いないほどの(この) 上(うへ)ない価値(かち)のあるもの(のだ)ということでしょう。なぜなら王(わう)の境遇(きんぐう)というものは世間(よこしま)の人が血眼(ちけん)になって願(ねが)い求める(この) 世(よ)の最高(さいこう) 価値(かち)を象徴(しょうちゆう)した(もの)です。この世(よ)で一番(いちばん) 願(ねが)い求める(もの)は財力(ざいりき)であり、権力(けんりき)であり、名声(めいせい)なのであります。よう。それを一身(いつしん)に得(と)ている境遇(きんぐう)を王位(わうい)で表(あらわ)しています」
p 「そうすると、世間(よこしま)がひたすら求(もと)めている(この) 世(よ)の宝(たから)、それらを捨てても悔(くは)いないほどの価値(かち)ある(もの)が仏法(ぶつぽう)だ(という)ことをあらわしている(のです)ね」
d 「そういうことだ(とお聞)かせ頂(う)いでいます。そして法蔵菩薩(ほっそうぼさつ)は世自在王(よしみぞの) 仏の前(まへ)で、ご自分の深い願(ねが)いを偈(ぎ) (重誓偈) で述べられました」
p 《願(ねが)わくは我(わが) 作(した) 仏(ぶつ) して、聖法(しょうぽう)の王(わう)と齊(ひと) しからん》
すなわち(私は) 聖法(しょうぽう)の王(わう)である師(し)の世自在王(よしみぞの) 仏(ぶつ)のごとく(になり)たい(と)の(べ)、その(ため)に菩薩(ぼさつ)の修行(しゆぎやう)をして、一切(いっけつ)の衆生(しゆじやう)にまことの平安(へいあん)を(与)えたい(と)願(ねが)い、《吾(わが) 誓(ちか)う、仏(ぶつ)を(得)んに、あまねく(この) 願(ねが)を行(な)せん。一切(いっけつ)の恐(おそ)懼(く)に、(ため)に大安(たいあん)を作(な)さん》

(願(ねが)わくは、わたしも仏(ぶつ)となるべく修行(しゆぎやう)し、迷(まよ)いの人々(ひと)をすべく救(すく)い、さとりの世界(せかい)に至(いた)らせたい)
と誓(ちか)われました。一切(いっけつ)の恐(おそ)懼(く)とは恐(おそ)れおの(の) いて(いる)者(もの)たち(と)いう(こと)で、私(わが)たちの(こと)です」
*
p 「法蔵菩薩(ほっそうぼさつ)は私(わが)たちを(へ)おそれおの(の) いて(いる)者(もの)と見(み)ておられる(のです)ね」
d 「ええ、死(し)につ(つ)つあり、老(ら)いていく(こと)をう(れ)い、死(し)後のゆ(ゆ)く末(すえ)をあん(じ)て(いる)者(もの)、病(びやう)をおそれ、生計(せいけい)の不安(ふあん)と災難(さいなん)がふりかか(っ)て気(き)はし(な)いか(と)おの(の) いて(いる)者(もの)、他者(たが)からの非難(ひなん)におび(え)て(いる)者(もの)であり、さら(に)は自(みづか)らの罪(つみ)と(その) 報(むく)い(を)おそれ、日々(に)が(あ)ま(り)にも無意味(むぎみ)に過(と)ぎゆく(こと)への(やり)きれ(な)さをかか(え)て(いる)など、(そう)い(う)苦惱(くなん)の者(もの)として見(み)て(お)られる(ので)ありま(し)よう」
p 「(そう)い(う)私(わが)たち(に) (大安(たいあん)をなさん) (と)い(わ)れ(て)い(る) (のです)ね」
d 「ええ、おそれ(と)不安(ふあん)に生(な)きる私(わが)たち(に)大安(たいあん)すなわち涅槃(ねはん)のサトリ(を) (与)えたい(と)願(ねが)われる(のです)」
p 「(それ)を(実)現(じつげん)する(ため)に法蔵菩薩(ほっそうぼさつ)は修行(しゆぎやう)を志(し)された(こと)です(が)、(ど)の(よ)うな修行(しゆぎやう)ですか」
d 「(布施(ほんし)・持戒(ぢけい)・忍辱(にんじやく)・精進(しゆじん)・智慧(ぢぢ)とい(わ)れるサトリ(へ)の菩薩(ぼさつ)行(ぎやう)が(中)心(しん)です」
p 「法蔵菩薩(ほっそうぼさつ)は菩薩(ぼさつ)行(ぎやう)によ(っ)て、

一切(いっけつ)衆生(しゆじやう)に大(だい)なる安(やす)らぎを(与)えたい(と)願(ねが)われ、(それ)を(ど)の(よ)うに(して)私(わが)たち(に) (与)え(よう)と(さ)れる(のです)か」
d 「(それは)《我(わが) 仏(ぶつ)に作(な)らん、国(こく)土(ど)を(して)第一(だいいち)ならしめん。その衆(しゆ)衆(しゆ)、奇妙(きせう)にして、道場(どうじやう)、超絶(ちゆうせつ)ならん。国泥洹(こくねいげん)のごとく(して)、等双(とうじゆう)なけん。我(わが) ま(ま)に哀愍(あひみん)して、一切(いっけつ)を度脱(たくだつ)せん》
(わたし)が(仏(ぶつ)に)なる(とき)は、国(こく)土(ど)をも(つ)とも尊(た)い(もの)に(し)よう。住(す)む人々(ひと)は徳(とく)が(高)く、さとりの場(ば)も超(こ)え(す)ぐ(れ)て、涅槃(ねはん)の世界(せかい)その(もの)の(よ)うに、(なら)ぶ(もの)なく(す)ぐ(れ)た(国(こく)とし)よう。わたしは(あ)われ(み)の(心(こころ))も(つ)て、(す)べて(の人(ひと)々(々))を(救(すく)いたい) (と)う(た)われ(て)い(る) (ごと)く、(も)つとも優(ま)れた(サトリ)の(世界(せかい))として(の)浄土(じやうど)を開(ひ)き、(その) 浄土(じやうど)に衆生(しゆじやう)を(生(な)ま)れ(し)め(たい) (と)願(ねが)い、(浄土(じやうど) 往生(じやうじやう)への) 道(みち)に帰順(ききん)せ(し)める(こと)によ(っ)て、(この) 世(よ)に(お)いて(る) 衆生(しゆじやう)を(真(ま)に)生(な)か(し)め、(つ)い(に)は(完全(かんぜん)な) 涅槃(ねはん)の(安(やす)ら)ぎを(実(じつ)現(げん)した)いと願(ねが)われ(ました)。しかも(非)常に(心(こころ))を(打(う)た)れる(のです) (が)、(この) 願(ねが)い(の)う(た)の(最(さい)後(ご)に)《た(と)い、身(み)を(も)ろ(も)ろ(の) 苦毒(くどく)の(中(なかに))止(と)め(ると)も、我(わが) 行(ぎやう)、精進(しゆじん)に(して) 忍(しの)び(て) (つ)い(に)悔(く)い(じ)》(た(と)え) 地獄(ぢごく)の(苦(くる))に(この) 身(み)を(沈(しず)めて)も、(さと)り(を)求(もと)めて(耐)え(忍(しの)び、修行(しゆぎやう)に) 励(む)んで(決(けつ)して) 悔(く)い(る(こと)は)ない) (と)ま(で)仰(おほ)せ(ら)れ(て)い(ま)す。一切(いっけつ)

衆生を浄土へあらしめたい。衆生を救うための菩薩の行を励み、そのために我（法蔵）は苦毒（阿鼻地獄）にあつて苦を受けようとも、それをよく忍んで後悔はしないといわれるのです。衆生を安楽浄土へ、我は代わつて地獄の苦の中へ、という慈悲の極まりです」

p 「私たちの称える南無阿弥陀仏には、そういう法蔵菩薩の大悲がこもっているのですね」

d 「ええそうですね。如来法蔵様は私たちの罪悪を除かんがために、私が受けねばならない地獄の苦を、私に代わつて受けてご修行くださった、これを代受苦といえます」

* p 「代受苦というのは聞きなれない言葉ですが」

d 「代受苦とは、菩薩が一切衆生を救うための修行精神といふべきもので、（衆生に代わつて衆生の苦しみを受け、衆生の苦しみを救おう）という精神です」

p 「非常に崇高な心ですね」
d 「ええ、人の苦しみを見て同じ苦し、その苦しみを自らに代わつて引き受け、その人を安らかにならしめようとする、まさに慈悲の極まりです。これほど尊い行いはないといつていいと思います」

p 「こういう姿を学んで私たちは、人の行いはどうあるべきなのかを知るのですね」
d 「ええそうですね。法蔵菩

薩の姿は人間の行為の完全な鏡ともいえます。だからそれは同時に、人間はその鏡に照らして自分の行いがどうなっているかを反省し、自照されるのです。（ああ私はなんと浅ましい生き方をしているのか）」

p 「私たちのふだんの生活は、人を楽にするどころか、自分が幸せになるために他者をふんずけているような生活をしている。本当に罪の深い我が身だと知らされるのですね。こうした代受苦の精神で修行するのが真の菩薩なのです」

d 「ええそうですね。この菩薩の代受苦を『華嚴経』には詳しく説かれています。それを二・三引用してみます。現代語訳です」

が
《わたしは、地獄、餓鬼、畜生の三悪道のなかにおいて、衆生の代わりに苦をうけ、衆生をして、解脱を得しめよう。たといわたしが、そのために、はかり知れない苦惱をうけても、苦惱のゆえに、わたしの心が退いたり、おそれたり、おこたつたりして、衆生を捨てることができないうちにしよう》

《もし囚人が苦痛を受けるのを見ては、ボサツは大悲心をおこし、みずから獄舎におもむいて、かれをすくい、また、囚人が死地におくられるのを見ては、みずから身をすててかれの命にかわる》

《わたしは、自分の身をすてて、

かれのいのちに代わろう。たといい、わたしの苦痛がはかり知れなくとも、その苦痛をかれに代わつてうけ、かれをして解脱せしめよう。またこのような（他の）苦痛を見て、しかも代わつてうけないのは、大利を失うことになる。なぜかという、わたしは、ひとえに衆生をすくいたために、さどりの心をおこしたのである。だから身をすてて、かれの苦痛をうけよう》

p 「阿弥陀仏の前身である法蔵菩薩は代受苦の精神で修行をされて私どもを救おうとされたのです」

d 「ええ、それが、法蔵菩薩が世自在王仏のみ前で述べられた重誓偈といううたによく表されています」

* p 「代受苦のお話を聞いて、ふつと思ひ出すのが、キリスト教でのイエスの受難の話です。イエスが神の掟に背いた人類の罪をすべて引き受け、罪の報いである死の罰の苦しみを代わつて受け、十字架上で処刑されたという話です」

d 「ええ、あの話は代受苦に通じる姿であると思います」

p 「では法蔵菩薩とイエスとは同じといえますか」

d 「いいえ違いがいろいろあります。イエスは人間の子でありながら同時に神のひとり子であるといわれ、人類が生まれてこ

の方そういう人は一回かぎりの出現であることと、またイエスが処刑されることによつて、人類の罪を解消したという点などが、法蔵菩薩とは違います」

p 「どう違いますか」

d 「まず法蔵菩薩は人間の歴史の上に誕生した人と考える必要はありません。阿弥陀佛の広大な大悲の活動を菩薩の修行として表現した姿と受け取つていいわけですね。ところがイエスは人でありつつ神であるという極めて特別な人で、人間の歴史上で最初で最後の人だということです」

p 「なぜ人であるイエスが神のひとり子であるといわねばならないのですか」

d 「イエスが単なる人なら、イエスの十字架上の死が人類の罪をあがなうという意味は出てこないからです。それと、イエスはいわゆる神人であるということとは奇跡の中の奇跡ということになりますから、これを信じるのはかなり無理がかかることとなります。それでキリスト教の学者の中に、イエスが神の子だというのは、イエスの弟子たち

のイエスに對する解積にすぎない主張とする神学者たちが出

てきています」
p 「そうですね。それはともかく法蔵菩薩は我々に代わつて代受苦といわれる永い菩薩行を行われた、その大悲心と功德が南無阿弥陀仏にこもっているのです」
d 「そうですね」

(了)

毎月《念仏座談会の変更》

第一土曜日→→→ 毎月2日

第三土曜日→→→ 毎月12日

(時刻は変わらず、午後3時より)

*都合により、平成17年1月より毎月の「念仏座談会」例会を上記の通りに変更いたします。

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日(水)

午後二時始まり

ご講師 栖雲 幸雄 師

歎異抄 第十七章第一講

辺地へんじの往生をとぐるひと、ついに地獄におつべしということ。この条、いづれの証文にみえそうろうぞや。学生がくせいだつるひとのなかに、いいださるることにてそうろうなるこそ、あさましくそうらえ。経論聖教をば、いかようにみなされてそうろうやらん。(歎異抄第十七章より)

現代語訳(辺地といわれる方便の浄土に往生する人は、結局は地獄に墮おちることになるということについて。このことは、どこにそのような証拠となる文があるのでしようか。これは学者ぶつた人の中からいいだされたと聞きますが、あきれた話です。そのような人は経典や祖師方の書かれたものをどのように読まれているのでしようか。)

* この章について、金子大栄先生の『歎異抄聞思録』に、

「歎異抄で唯円房は、親鸞聖人の教を受け取る人々の中において二派ふたはがあり、その二派は、右も間違い左も間違いというのであります。念仏を称えなければ浄土へ往ゆけぬという右も間違いなら、道理が分からなければ参れぬという左も間違い。すると右でも左でもない、その真ん中を明かにしようとするのが歎異抄の立場であります」

と述べておられます。歎異抄の中に出てくる異義は大きく分けてここに引用されている二つの中に収まるのです。

そこで「学生だつる人」というのは、「いくら念仏をもうしても、念仏で救われる道理がよく分からなければただ念仏しているだけでは助からない」といい、「たとえ念仏して辺地という浄土の片隅にいったんは生まれたとしても、最後には地獄へ墮おちる」とまでいいつのる、そういう人たちの言いぐさを唯円房は批判されるのです。こういう人たちの説はお聖教のどこにもないことですから、「いづれの証文にみえそうろうぞや」と唯円房は言われるのです。

* 浄土の祖師方は不可思議な「念仏往生の願」を万人救済の法としてお説きになりました。「出離の縁あることなき身」と知らしめられた人たちは、この本願の思し召しのままに受けて入れ、自らの人生を往生浄土の一道に決定したのです。しかしなお多くの人たちは浄土の教を聞きながらも自分の能力をたのみにし、弥陀の本願を素直に受け取りませんでした。自力とは

「わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをばげみ、わがさまさまの善根をたのみ」となり(一念多念文意)ということですから、自力に執している人たちは「助けてやるから、我が名を称えよ」という念仏往生の誓いを聞いても、そこに広大な大悲を感じる事ができず、「称えるばかりでよい」といわれる言葉が如来の大悲心であることを知らず、あたかも律法のごとく、人間の方でなさねばならぬ行のごとく、「称えていささすればいいのだ」と受けとってしまふのです。第十八願をたてられた如来法藏様はそのことを悲しみ、そういう人々たちをも遂には真実の浄土に導かれるた

めに、自力に念仏申して行く者を仮の浄土、いわば浄土の片隅に生まれさせ、そこでさらに法に養い育てて、ついには真実浄土へ生まれさせようとされるのでありましよう。ここにも阿弥陀仏の深い大悲のご配慮を感じます。

* 念仏往生の願は聖人のお言葉でいえば《弥陀の本願ともうすは、名号をとえんものをば極楽へむかえんとちかわせたまいたるをふかく信じて、となうるがめでたきことにてそうろうなり》

という誓願であるが、真宗はこの誓願を不思議と信じて念仏申す外にはないのであります。

ところが「学生だつる人」すなわち金子先生のお言葉でいえば「(念仏の)道理が分からねば(浄土へ)参れぬ」と説く人たちがいました。「我が名を称えよ、浄土へ生まれさせる」の仰せを聞いてもすなおに信受せず、「念仏もうすだけで浄土に生まれるというのは納得がいかない、それよりも念仏の深い道理に目覚めることのが大事であつて、わけもわからずに念仏するだけでどうして浄土に生まれられようか」というのです。これは一見いかにもと思われませんが、そこにあるのは我が身の能力の限界を知らず、広大な不可思議の大悲を受けとれない姿です。

* このような「助かる道理を納得し理解して助かるう」という姿は現代も同じとはいえないでしようか。

「我が名を称えよ」といわれるご本願よりも、「今ここにすでに生きている我が身の事実に目覚めよ」とか「我が身の罪惡を自覚して、我が身の姿を知れ」とか、「ものみなすべて因縁であり、縁起

の道理によって成り立っている。今私たちが生きているのはさまざまなおかげによつて生かされている。そういう因縁の道理に目覚めよ」とかいう話を真宗信心の中心内容にしてしまふのです。なるほど、それは道理としてはそのとおりであり、私たちの知性に納得しやすく、私たちの考えも思い及ぶ話です。

しかしそれらは「誓願の不思議」といわれる弥陀の本願の仰せをかたわらにおき、「念仏しても、深い念仏の道理がわからなければダメだ」という「学生だつる人」に似てはいないでしようか。しかもこういう説は真宗のお聖教の「いづれの証文にみえそうろう」といわねばなりません。

* だいたい聖道門の法は、聖人が「思議の法」といわれ、私たちの思議すなわちおもんばかりでなんと分かる教です。だから私たちは「考えて分かる」方に惹かれやすい。

一方、浄土の法門は「不可思議の法」といわれて、人間の思いの手のとどかぬ法である。だから聞けども弥陀の本願はかけぬかない我が身のためとはなかなか受けとれません。それでともすると「分かる話は受け入れるが分からぬ話は受け取れない」となってしまう。

もちろん「思議の法」としての仏法を深く学び、それを自覚的に了解して己の道を開いていくことも可能でありましよう。しかしそれは、歎異抄に伝えられている「よき人の仰せ」を信じる信心、「誓願を不思議と信じ」る聖人の信心とは異なつてきます。そこを唯円房は歎異抄で「異なるを嘆く」といわれるのでありましよう。